

---

# 君に出会う春の季節

IKA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君に出会う春の季節

### 【Nコード】

N6657Y

### 【作者名】

I K A

### 【あらすじ】

春           俺は君に出会った。それは、桜のように儚く、短く、そして       美しい日々の始まりだった。これは作者I K Aの使うオリキャラ『朝我零』を主人公に作られた儚い恋愛物語。沢山の感想お待ちしております。

## 桜のプロローグ

俺は大切な人を失った

俺がいつも後悔する時、空は曇り、雨が降っていた

そう。今日の 今も

空は白い雲に覆われ、その雲からは大量の滴が重力に流されるように落ちてくる。

そして俺がいつも後悔しているとき、俺の手に 傘は無かった。

そう。今日の 今も

全身がずぶ濡れでも、そんな事はお構いなしで歩く。

街中を 傘も刺さずに歩く

“君”を

失ったから

君と出会ったのは、桜が咲く季節。

俺がまだ中学生の制服と言うものに慣れていなかった時。

俺の学校の通学路に小さな病院があって、君は病室の窓から俺を見て  
手を振ってくれた。

舞い散る桜と共に手を振る君の笑顔は、桜と同じように  
たな始まりを予感させてくれた。 新

だから俺は学校帰りに君の病室に向かって、挨拶をした。

『俺、朝我<sup>ともがれい</sup>零<sup>れい</sup>って言うんだ。君は？』

そう聞くと君は、優しい笑顔で答えたんだ。

『私は彩音。鈴乃<sup>すずのあやね</sup>彩音』

個室の病室のベッドで上半身だけ起こして、病院食を少量しか口にしないでいた君はそう答えた。

だからだろうか・・・君は、やせ細っていて、弱々しかった。

だから俺は聞いてみた。

『ごはん、食べないの？』

そう言つと君は頬をぷくつと膨らませて答えたんだ。

『だって病院のご飯味がしないんだよ？食べてみる？』

そう言つたので試しにお粥を口にした。

『・・・ホントだ。味がしない・・・』

ほんの少量の塩っけがあるだけで、それ以外は味なしであった。

他にもカボチャの煮物があるが、きっとこれも同じだろう。

『だから私、果物しか食べないの』

そう聞いたとき、患者は大変なんだなと感じたのを覚えてる。

だからだろうか・・・俺は、彼女に何か食べさせたかった。

『あ、俺の弁当の残り・・・良かったら食べるか？』

鞆の中から学校のお昼に食べた弁当を出して彼女のテーブルに置いた。

『え・・・でも私だけもらうなんて・・・』

食べたそうだけど、彼女は遠慮していた。

だから俺は病院食を指さして言った。

『君の食事と俺の弁当を交換しないか？』

そうすればお互いに納得がいくよなって思ったんだ。

そう言うとき君は満面の笑で俺に言った。

『・・・うん!』

俺は弁当を君のテーブルに置いた。

そして俺は君のテーブルに置かれていた皿を取って食べた。

『・・・味無！？』  
あじな

『んんゝ！！美味しい！！！！』

これが俺と君のリアクションだった。

お互いにその表情を見合って、笑いあった。

これが君と僕の  
桜のように、短く・・・そして美しい出会い  
だった。

## 君と俺の会話と、俺の知らない事実（前書き）

これは桜の様に短い物語なので、少しだけの投稿です。

短い物語に描かれる、長く感じる物語。

それを追求していききたいと思っています。



## 君と俺の会話と、俺の知らない事実

君と出会って早1週間。

まだ桜は綺麗に、美しく舞い散っている。

俺は学校帰りに毎日欠かさず君の病室に向かっていて、毎日君と料理を交換して食べていた。

『やっぱり美味しいー!!』

『やっぱり味無!!』

そう言っただけでも笑いあって、残さず食べる。

一週間も俺の弁当を食べ続けると、君の体は大分良くなっていた。

細身の体から少女らしい体つきになっていた。

そして俺が毎日話す会話は、俺の学校での話し。

今日の授業で何を学んだか。

今日の学校で何か面白いこと。

今日の学校でどんな人が何をしたかとか・・・

色々話した。

話題は全て俺が勝手に出して、俺が勝手にベラベラ喋っていた。

それを君は表情一つ変えず、ただ笑顔で俺の話を聞いてくれた。

話し終わると、俺は君に何がしてみたいかとか聞いたりした。

『君は将来、何になりたいの？』

『私はねー・・・保育士になりたいな』

君はそう言ってくれた。

俺は何となく、君が園児達に囲まれている君の姿を連想した。

『ああ・・・良い夢だね。なんか淒く似合う気がする』

『ほんとに！？ありがとう！！』

彼女は幸せそうな笑でそう言った。

俺は、その笑を見たから、保育士に向いてるんだって思った。

だってその笑顔は  
だって思ったから。

俺をそして・・・皆を幸せに出来る笑顔

その笑顔と、窓の外で舞い散る桜は・・・俺の心を春の様に温めてくれる。

そんな笑顔に包まれた子供達は、きっと幸せになるんだって・・・  
そう思えるから。

俺は病院の帰り、看護師の人に呼ばれ、俺は検査室に呼ばれた。

そこに着くと、医者の男性が座っていて、俺に話しかける。

『君は彼女の家族ですか？』

『いいえ。俺は・・・彼女の友達です』

そう。俺と彼女は友達同士の関係・・・ってことだと思う。

意識したことはないけど、なんか・・・納得の行く言葉だった。

『・・・君は、彼女の“病”を・・・知っていますか？』

今、素直に知らないと思った。

そう言えば俺は、彼女がどんな病にかかっているのか知らなかった。

そして医者から聞かされる、君の病。<sup>げんざい</sup>

彼女

『ガンです』

え？

俺は、言葉を疑った。

[illegible]

「う、嘘……でしょ？　なんかの冗談じゃ……」

俺は言葉を詰まらせながら、必死に言葉を放つ。

だが医者あなたは、俺に全てを言った。げんじつ

『ホントです。既に手遅れで・・・後数週間の命です』

数週間・・・それって・・・一ヶ月もない・・・のか・・・

嘘だろ・・・君は、そんなに苦しい運命だったのか!?

『彼女は・・・鈴乃は、知ってるんですか?』

『彼女には伝えていない。けれど・・・彼女は既に、気づいてると思う』

その後、俺は一人雨の中、傘も刺さずに歩いていた。

『……………』

俺は、後悔していた。

自分自身を強く責めていた。

俺は君の事を、何も分かっていなかった。

なのに俺は勝手に君に色んな事をベラベラと……！

恥ずかし過ぎて……悔しすぎて……

俺は……なんて馬鹿野郎なんだよ……！！！！

俺は、君に何もしてあげてない……何も出来ていない……

俺は・・・どうすればいいんだ・・・

俺に、何ができるんだ？

・・・分からない。



けれど、君の傍にいてあげることくらいは出来る。

独りぼっちで死なせはしない。

そんな寂しい死なんて・・・絶対に・・・絶対に!!!

そう心に誓い、俺はこの日を堺に      学校を無断欠席する。

## 沢山のありがとう（前書き）

今回はちょっとシリアスな内容になる・・・かも。

残り少ない君の人生。

君の人生の時間は桜の舞い散るのと同じ。

だとするなら俺はその桜を毎日見ようと思った。

だから・・・

## 沢山のありがとう

鈴乃がガンと言われてから俺は学校を無断欠席して病院に通うようになった。

そして彼女と色んなゲームをした。

モンハンとかバイオハザードとか。

君が知らない物語の本を読んであげたり。

そう、俺は彼女の人生に色々な経験をさせようとした。

それらも必死で。

勉強する時間なんて、彼女の短い人生に比べたら小さい。

ただ俺は、君の傍にいたいと思った。

この感情は、助けたいって気持ちなんだろう。

なんで・・・助けたいと思ったのだろうか？

出会って一ヶ月も経っていないのに、俺は君の事を大切な存在になつて・・・

・・・というか、いつの間にか君の事を考えない日が無くなってるな。



そつだ。まだ希望を捨ててはいけない。

だってまだ可能性はあるはずだからだ。

俺だって・・・まだ君を失いたくないから。

でも君はこの時、言つたよね。

『私、桜が枯れたら

死ぬんだ』

そう言つて、俺に言つたよね。

『ごめんね、出会つてすぐにさよならなんて・・・ほんと  
はもつと早く言いたかつただけだね・・・私、なんか、朝君の話  
しの楽しい話を聞いてたら・・・言い出せなくて・・・』

そう言っているときの君は、泣いていた。

必死に堪えるようにしているけど、泣いていた。

苦しそうに・・・寂しそうに・・・泣いていた。

『・・・怖い？』

そう聞いた。

俺は君に『死なないよ』とは言わず、怖いのかと聞いた。

君は素直に答えてくれた。

『怖い・・・怖いよぉ・・・でも・・・もう、どうにもな  
らないから・・・』

君は涙を流しながら、窓の外で綺麗に舞い散る桜を見ながら言つた。

『朝君。私、桜の木を見て、自分の時間が後少ないんだつ  
て感じるとね・・・いつも、いつも・・・いつも、朝君の

笑顔が浮かんでくるの』

『え・・・』

君は涙を両手で拭き取って頬を少し赤くして言った。

『私のこの怖いって気持ちは、朝君がいるから無くなるの。朝君は、私の中で大切な人になって、私の怖い気持ちを優しく包んでくれたの』

そう聞いた時、俺は涙を流していた。

俺は別に、そんな大層な事をした訳ではない。

役に立つことなんてひとつもないし、大切な人なんてもっての外だ。

それなのに君は、俺を大切な人だって言った。

それが俺にとって、どれだけ嬉しかったか。

『と、朝君！？なんで泣いてるの！？』

ほら、君が心配してる。

早く泣きやめよ。

かつこ悪い、女の子の目の前で汚く涙流して・・・カッコ悪すぎる。

それに、泣かないって決めたじゃないか。

君の方がもつと泣きたいに決まってるんだから。

なのに・・・何で俺がこんな泣いてるんだ・・・みつともない。

『悪い・・・なんでも、無いから・・・』

そう言つて俺は右腕で何度も涙を拭う。

だが涙は全く止まらない。

君が心配そうに見てる。

俺は、何で君を心配にさせてるんだ・・・

安心させるつもりだったのに・・・なんで・・・

くそ・・・早く止まれよ!!

くそ!!!!くそつ!!!!!!

『・・・ありがとつ、朝君』



『・・・え』

君は柔らかな笑で俺にそう言って、俺の右頬に左手を添えた。

『ありがとう、私の為に泣いてくれて』

俺が・・・君の為に、泣いてる・・・？

そして君は続けて言った。

『ありがとう、私の為に学校を休んでくれて』

君は知っていた、俺が学校をサボっていたこと。

『ありがとう、私の為に弁当作ってきてくれて』

そして毎朝、君が好きそうな弁当を作ってあげてもって言っていた事。

『ありがとう、私に色んなお話をしてくれて』

君の世界を広げるために、必死で話題を出して話した。

『ありがとう、私に毎日会いに来てくれて』

それは君を一人でいて欲しくないから・・・

そして最後に君は言った。

とう

『ありがとう、私に出会ってくれて・・・ほんとにありが

私の、初恋の男の子

俺は驚いた。

君は俺を、初恋の人と言ったから。

驚いたからこそ、聞いた。

『何で・・・俺なんだ？』

『最初は、一目惚れだったの。一人で窓の外の桜を見てみると、制服で歩く朝君の姿があつて、それで朝君は私を見て手を振ってくれたから・・・その時から、運命みたいなを感じたの』

知らなかった。

あの時から、既に君は俺の事を・・・

どうして早く気づいてあげられなかったのだろうか。

気づいてあげていれば、俺は君にもっと何かをしてあげられてかもしれない。

だって・・・俺だって・・・

『俺だって・・・“彩音”の事が、好きだから』

『え／＼／＼／』

そう。最初に出会った時から、何となく感じていた・・・胸が暖かくなる感覚。

君の笑顔を見るたびに、心臓がドクンと跳ねる。

その笑顔が見たいから、必死で楽しい話しや面白い話しを出した。

いつの間にか、君の為に必死だったんだ。

そして君に初恋の人と言われた時、俺の中で納得するような単語が出たんだ。

『好き』

俺の中でその単語が出た瞬間、凄くドキドキしたけど、それと同時に嬉しかった。

これが・・・好きってことなんだって。

君は俺の言葉を聞いて顔を真っ赤にして恥ずかしそうに俯いた。

『う／＼／＼／＼は、初めて告白されたから／＼／＼／＼どう  
言えば良いのか分からない／＼／＼／』

『彩音の好きにして良いよ。俺の事が好きなら好き。嫌い  
なら、嫌い。それで良い』

そう言つと君は俺の両頬を両手で包んで、俺の顔を君の顔に近づけ  
た。

近づく顔と顔。

そして俺の顔も赤くなって、熱くなった。

心拍数も物凄い速度だ。

きつと君も同じなのだろう。

両手が震えてる。

だからきつと緊張してるのだろう。

でも、これが君の答えなんだよな。

そして二人の距離は10cmから・・・5cm。

4・・・3・・・2・・・1

『ん／／／／／／／』

桜が舞い散る中、俺と君の影は一つに重なった。



さよなら・・・君の声 消えないで・・・君の声

そして時は流れ、桜の木の桜も、あと少しの桜となった。

近づく別れを惜しみながらも俺と君は何も変わらない日々を送っていた。

君の望むことは、色々としてあげた。

勉強を教えてとか、雑誌を読ませてとか、いろんな服を着たいとか・

その望みを叶えてあげると、君はいつも桜の様に美しい笑顔を見せてくれた。

けれど、やはり桜のようにそれは・・・儚いものだって感じたりもした。

でも、そうして苦しくなる度に俺と君は唇を重ねた。

イチャイチャし過ぎかもしれないけど、君には沢山の幸せを感じて欲しいんだ。

短い・・・桜のような人生なのだとしたら、咲いている間を大切にしたいから。

『もう、春も終わりだね』

『そうだな。早いな』

会話の時はいつも手を繋いで、俺もベットに座って桜を見ながらだった。

君は俺の肩に頭をコトンと置いていた。

『こうしてると、すごいドキドキするの』

『俺も、ドキドキする』

お互いを見つめ合って、頬を赤くして・・・吸い込まれる様に近づいて、唇を重ねる。

幸せに包まれ、それが末永く続いて欲しいと・・・願わずにはいられなかった。

だけど、そんな幸せな日々は、舞い散る桜のように散っていった。

ある日、君は胸を痛そうにして苦しんだ。

『う……ぐ……くう……』

『大丈夫か！？』

俺はすぐにナースコールを押した。

それも一回ではなく連打。

早くしろって気持ちが強かったから本気で連打した。

待っている間の時間は、とても長く感じた。

たった10秒が、1時間にも感じるほど。

俺は何をすればいいのか分からなかった。

その間にも過呼吸になって苦しむ君。

俺は、どうすればいいんだ!?

『ぐ……うう……朝……君……』

『何だ!?!』

苦しい筈なのに、君は俺を呼んだ。

『ごめ……ん……朝……君……うう……』

君は、謝ったんだ。

今……君の命の危機なのに。

『謝るなよ!!今はそんなことよりも、自分の事を気にしろよ!!!』

そうだ、今は俺なんかのことよりも、自分の事を気にするんだ。

『だつ、て……好き、なんだもん……好きな、人、気にするの……当然、でしょ』

君は、誰よりも俺のことを気にした。

それは、俺の事が好きだからだった。

なんで・・・好きな人を優先するんだよ・・・

それから1分くらいで医者達が来て、君を運んでいった。

[illegible]

•  
•  
•  
翌日。

手術は一日中行われ、何とか手術で一命と取り留めた。

だが、君はもう……

病室に運ばれ、君は酸素マスクと点滴をつけられ、寝たきりにさせられた。

俺は君のベットの前の椅子に座って、君の左手を両手で包み込んでいた。

寝ている君を見つめ、点滴のぽたぽたと落ちる音だけが病室に響いていた。

『・・・まだ、桜は咲いてる』

窓の外にある桜の木を見ると、ほとんど散っているが、まだ咲いている。

桜が枯れてないなら・・・まだ君の人生は終わってない。

だから・・・早く目を覚ましてくれ。

でないと・・・桜が枯れてしまう。

夜になった。

君はまだ目覚めない。

いつも笑顔でいた君は今、無表情で・・・眠っていた。

このまま死んでしまうのではないかと思うと、胸が痛くて・・・

でも、泣かぬように笑ってみた。

俺は空を見た。

星のない空を見上げ、願うように息をした。

想うほどにくり返してく、痛みの中で……

早く、君の笑顔が見たい。

君の幸せそうな笑顔を見たい。

君が恥ずかしそうに顔を赤くする姿を見たい。

色んな・・・色んな顔を、今は見たい。

[illegible]

•  
•  
•  
翌日。

俺はその日、病室で眠っていた。

目を覚ましたのは、何か動いたから。

目を開けて両手を見ると、君の手が……俺の手を握っていた。

『おはよう、朝君』

君は、目を覚ましてくれて、いつもの笑顔を……見せてくれたん

だ。

でも、その表情は弱々しくて・・・

だから・・・なのだろう。

君は、俺に言った。

『さよなら・・・朝君。忘れないよ。ずっと、たくさんの  
思い出が・・・私を包むから』

『やめろ・・・彩音』

だけど君は言葉を止めない。

『悲しくなんてないよ？だって朝君を想えば柔らかな温も  
りが私を包むから・・・』

『やめろって・・・言ってるだろ・・・』

俺は涙を堪えながら、必死に言葉を放つ。

だけど君は、言葉を止めようとしなない。



『言葉だけじゃなくても・・・届くよ私たちだけの絆が・・・ここにがあるから』

きつとそれは精一杯の強がり、俺を苦しめない為なのかもしれないけれど・・・それはむしろ、俺を苦しめてる。

『朝君に出逢えた事私の、大切な宝物だよ』

その時、空いていた窓から桜ヒラリと来て、日差しと共に彼女を輝かせた。

まるで天からの道導の様に・・・

『やめろ・・・行くな・・・』

もう、俺は涙を堪えてなんかいなかった。

正直に泣いていた。

『いつまでも心の奥で、枯れない記憶が・・・私にはあるから・・・』

だからいつまでも忘れないよ

その笑顔

ありがとう

『

そして君は一滴の涙を流して

散った。

それは、窓の外に咲いていた桜の木が散ったの……同時だった。

## 約束の桜光（前書き）

散り終わった桜と終わった君の人生。

最期に残した言葉は、今も生きている俺の人生に、大きく伸し掛る。

## 約束の桜光

俺は大切な人を失った

俺がいつも後悔する時、空は曇り、雨が降っていた

そう。今日の　　今も

空は白い雲に覆われ、その雲からは大量の滴が重力に流されるように落ちてくる。

そして俺がいつも後悔しているとき、俺の手に　　傘は無かった。

そう。今日の　　今も

全身がずぶ濡れでも、そんな事はお構いなしで歩く。

街中を　　傘も刺さずに歩く

“君”を　　失ったから

どこを歩いてても、桜の木なんて無かった。

そう。桜は全て・・・枯れてしまったのだ。

春と言う季節が終わり、君との時間も終わった。

楽しかった。幸せだった。大切だった。

そんな日々はもう、帰ってはこない。

そう　　帰って・・・来ないんだ。

『つ・・・う・・・ああ・・・』

最初は、街中で声を必死に抑えながら涙を流した。

何でこんなにも苦しいのだろう・・・

何でこんなにも辛いのだろう・・・

何でこんなにも寂しいのだろう・・・



それはきつと、君との日々が・・・君と共に生きた人生が、何よりもかけがえのないものだったから。

だから終わってしまった・・・消えてしまった今、失った悲しみにくれている。

『失う』って、こんなにも重くて・・・辛くて・・・寂しいんだな。

『・・・』

そして向かってしまうのは、君が入院していた病院。

別に来ても何も無いのに・・・誰もいないのに・・・来てしまう。それは日課だったからなのと、どこかでまだ君の死を認めたくないから。

いい加減にけじめをつけないといけないのに・・・俺はまだ、君のことを諦めきれないんだ。

それは、大切な人だから。

大好きで、大好きで大好きで大好きで・・・大好きで！！！！！！

一生分の大好きを使っても、君の事が大好きだから！！！！

その想いは、今も変わることなく・・・ここにあって、ここに大きく存在する。

俺は君を忘れていないんだ。

ただ、君を失った事実から逃げてるんだ。

分かってる。そんなこと、頭の中ならいくらだって分かってるんだよ！！！！

でも、理論じゃないんだ！！

方程式じゃないんだ！！

結果じゃないんだ！！

これは俺の感情論で、この結果を認めないってことなんだ。

彩音

降りしきる雨の空を見上げながら、俺はやまない雨にうたれ続けた。

あ  
の  
・  
・  
・  
君

その時、俺に声をかけた一人の女性。

傘をさして俺に話しかけてきたその女性は、どこか懐かしい雰囲気  
をだす人で、誰かに似ている気がした。

『私、彩音の母の愛音です』

そう。その人は、彩音の母だった。

だから似ている気がしたんだ。

『彩音の母が、俺に何のようですか？』

『彩音が君に渡して欲しいって……これを』

そう言って愛音さんは俺に一通の手紙を渡した。

桜色の封筒は、桜のシールで閉じてあつて女の子らしさ漂うもの  
だった。

『彩音がもし死んだら、これを……大切な人に渡してつ  
て……』

『っ!?!?』

涙が止まらなかった。

自分の死を覚悟して、それでも俺に届けたい事があつたのだと。

死んでもなお、俺に伝えたい事が・・・伝えきれない想いがあったこと。

なんで・・・何で生きている間に聞いてやれなかったんだ！？

俺は・・・いつも傍にいたのに・・・

『私ができるのはここまで。後は君の好きにしていいわ』

そう言って愛音さんはいなくなった。

俺は病院の中で雨宿りしながら、その封筒の中身を見た。

そこには丁寧に折りたたまれた手紙が入っていた。

俺はそれを読んだ。

もし、私が生きていたら読まないでください。

最初に書かれたのは、その一行だった。

いつか出来る、最愛の貴方へ

いつかと言うことは、俺と出会う前に書いたものだろう。

『この手紙を書いているころ、桜は咲いてますか？それとも、緑色の葉が多く彩る夏ですか？紅葉美しい秋ですか？それとも、もう冬ですか？』

君の文章は、どこか期待に胸を膨らませているような感じだった。

『　　ちゃんとご飯、食べていますか？私の様に、美味しくない病院食を食べていませんか？学校には行けてますか？ちゃんと勉強していますか？』

君らしい文だ。誰よりも、大切な人を心配する文章。

『　　きつと、桜を見ると、私を思い出してしまうけど、桜を嫌いにならないで。

桜は、私自身だから。

私は桜の様に美しく舞い、そして　　散ってゆく。

そんな私を、<sup>うぐさ</sup>どうか嫌いにならないで。』

嫌いになるわけないだろ？

だって桜は、君と俺を出会いのきっかけだったんだぞ？

『　　ごめんね・・・って、手紙で言ってしまうのは本当に卑怯だけど、やっぱりごめんなさい。

きつと貴方は私の死を認めないで生きるか、死んだ私の事を忘れて生きるかのどちらかだろうと思います。

けれど・・・忘れないください。

私は貴方を忘れない。

あなたの笑顔を忘れない。

あなたの涙を忘れない。

あなたの言葉一つ一つを忘れない。

あなたの温もりを忘れない。

あなたと交わした唇の感触も、あなたの好きって気持ちも・・・忘れないから。』

なに最後のほうに恥ずかしい文章書いてるんだよ・・・バカ。

それに、ここから紙がしわだらけだぞ。

涙流しながら書くんじゃないよ。

『 えっと・・・えっとね？言いたいことは、ひとつなの』

そして君は、こう書いた。



『私、鈴乃彩音は

しあわせもの  
幸福者でした』

『もし叶うのなら、私は桜となって、来年の春・・・大きくなったあなたに会いたいです』

そして文はそこで途切れるけど、最後の最後の方にこう書いてあった。

『最期にお節介だけど 私に操なんて立てないで、もっと長生きして、ずっとそばにいてくれるような、そんな女性と幸せになつてください』

そこで“表”の文章は全て終わった。

何となく裏面を見ると、そこには大きな文字で涙のあとのしわを残しながら書いてあった。

『私の初恋の 朝我零へ』

『……馬鹿やろっ』

俺は涙を流して、俯いた。

まったくもって、大きなお世話だ。

『他人の心配する前に、自分の心配しろって・・・いつも  
言ってるだろ、馬鹿やろっ』

ほんと、いつになったら自分の事が心配になれるんだよ・・・

しかも裏の方は俺と出会ってから書いたんだ。

でも・・・俺は・・・大丈夫だ。

君なんかより健康で、人生の時間は長い。

だから・・・俺の心配なんていないんだよ。

『・・・あ』

封筒の中をよく見ると、中にもう一枚の紙と・・・一枚の桜の花びらがあつた。

それは真新しいので、きつと俺と出会ってから書いたのだろう。

俺はそれを読んだ。

『　　ねえ朝君。雨は、いつか止むんだよ』

その一行は、俺の心に響いた。

そして続けて読む。

『止まない雨なんてない。どんな雨だって、いつかは止んで・・・晴れるんだよ』

君から、そんな深い言葉が出るなんてな。

『私ね、ほんと怖いんだ。死ぬのが・・・生きてる事が怖くて、呼吸して、心臓の鼓動を聴くのが凄く怖いんだ』

いつも誰かの心配をする君から、君自身の本音を聞くのは二度目だな。

『毎日死ぬ覚悟で生きるのは、とても辛い。でもね、そんな日々の中で咲いた桜と共に、朝君と出会ったの』

俺・・・か。

『朝君と出会って、私は生きる喜びを見つけたの。』

いつも、全てが怖くて仕方なかった私の人生を美しいものにしてくれたのは、朝君だよ』

違う・・・俺なんか、そんなことは・・・

『いつの間にか朝君の事が好きになって、朝君の傍にすることが何よりも喜びだったの』

喜びを、俺が見つけるきっかけになってあげられたのは、俺としても嬉しかった。

『私の中に降り続いていた雨に、傘をさしてくれたのは・・・朝君でした。』

朝君は傘も刺さないで歩き続ける私に傘をさして、一緒に歩いてくれました。

大きな傘で、私を守ってくれて・・・私を幸せにしてくれた。

だから私は、最期まで幸せに生きていけたの』

違うつて・・・俺は、そんな大きなことはしてないって。

そして最後の文章は、こんな言葉だった。

『朝君の雨は・・・まだ止んでないのかな？』

止んでいないのなら、傘をさしてください。

そして、歩いてください。

立ち止まっていたら、何も始まらないから・・・だから、朝君は歩き続けて。

そしていつか

私と、桜の木で再会しましょう。

だからさようならは言いません。

またね

」

『・・・ありがとう。彩音』

俺は、決めた。

また来年に咲く、桜きみに会うために・・・俺は傘をさして、前に進むよ。



そう言って俺が外を歩きだすときは、空は雲ひとつない晴れになっていた。

## 最終回 桜遍く世界（前書き）

彩音と言う桜との出会いから10年経った。

俺は新たな桜と出会い、幸せな人生を送っている。

そして10年経った春

俺は再び、あの木に会いに行く。

## 最終回 桜遍く世界

君との別れから、10年と言う月日が経ちました。

俺は君と再び出会い為に、いっぱい努力した。

高校受験、大学受験を終えて就職。

そして新しい恋人を作って、結婚した。

今は妻が一人と娘が一人の3人家族。

君の事を忘れたわけじゃない。

でも俺は幸せを手に入れたよ。

君が見ることができなかった世界は、代わりに全て俺が見た。

夏の夜空。

秋の紅葉。

冬の雪。

そして

桜並木。

君が見たいものは全て見て、君が喜ぶ姿が俺には浮かんた。

君はそれでも満足いかないかとも思ったから、色んな料理を食べたり、色んなスポーツをしたり、いろんなゲームをしたりした。

今の彼女と共に見たりしたから、きっと君は焼きもち焼いたかな？

そうだったら嬉しい。

だって、それだけ俺の事が好きだってことだろ？

俺だって君の事は好きだ。

・・・え？そんなことを言ったら今の妻が怒るって？

大丈夫。妻だって好きだ。

もちろん君も好きだ。

二人が好きだ。

欲張りかもしれない。

けれど俺には、大切な人なんだ。

ごめんな。

『いいよ。朝君は、そう言う人だって分ってるから』

・・・そうか。ありがとな。

『朝我君、どうかしたの？』

桜の木の下で、俺に声をかけてくる一人の女性。

『パパ抱っこー！』

その女性の胸に抱かれて俺をパパと呼ぶ幼き女の子。

『彼女が・・朝君の妻と娘ちゃん？』

ああ。この二人が、今の俺の人生で大切な存在だ。

『・・・良かった。幸せに生きてくれて』

それもこれも、全部君のおかげだよ。

『ううん。朝君が自分で行なったから、今の結果が生まれ  
たんだよ』

・・・ありがとう。

『うん。・・・それじゃ、またね』

ああ。じゃあな。

『初恋の

彩音』  
さいおん

『誰と話してたの?』

俺の妻はそう聞いてきた。

『・・・俺の、初恋の人』

そう言っつ俺は娘を抱っこして揺らしてあげる。

そうすると娘は大喜びで笑ってくれた。

桜の様に・・・美しく、可愛い顔で。

『パパ！！大好き！！！！』

そう言って娘に、俺も最高の笑で答える。

君が教えてくれた、最高の笑顔で・・・

娘の名を呼ぶ。



『ああ。俺もだよ

彩音

』

君によく似た笑顔を見せるから、その名を付けた。

君と同じ彩音。

『朝我彩音』

もしかしたら君の未来の名前になっていたかもしれないその名は、俺の娘に託された。

また来年の桜も、君と俺と、妻と娘の4人で・・・散りゆく桜を見ていこう。

『またね』と言った。

またねは、また会うための約束。

その約束は10年間変わらず、守っているよ。

だから、また来年も一緒に・・・皆で。

舞い散る桜を、桜色の季節に見ような。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6657y/>

---

君に出会う春の季節

2011年11月21日12時05分発行